

I

子どもという主題は、昔から韓国の英米文学研究における一般的な文学言説から除外されてきた。とりわけ儒教の伝統が色濃く残る韓国社会では、子どもの数が減少し、子どもの教育と人格形成について関心が高まっているにもかかわらず、子どもの社会的立場はまだ弱い。しかし、大人と対比して子どもが示唆するものを内省的に再評価する動きが、新聞、マスメディア、学問の世界でみられることは注目に値する。同様に、環境に関して増大する危機感も私たちの注意を引く最近の変化の一つである。かつては無料で際限のない人間への贈り物だとみなされていた山や水や空気は、技術革新と破壊的文明化から守らなければならない重要な要素となった。

この研究では、子どもと自然という二つの話題を同時に扱い、東洋と西洋の民話と妖精物語を比較しつつ、子どもと自然のテーマ上の結び付きとその文化的含意を考察する。人間社会を映す純粋な鏡である自然と子どもは、理想化された生態系も人間社会の様々な葛藤も顕わにする。数多くある自然の要素の中で、地球の表面も人間の構成要素も70%が水であるという単純な理由から、水は最も自然なものと言うことができるだろう。それゆえ、水と人間との、特にその原型としての子どもとの相互作用は、妖精物語や民話、神話において最もよく登場してきたモチーフの一つである。水と子どもに焦点を置き、本稿では三つのテキスト、すなわち韓国の伝統的民話として『シム・チョン』の物語、西洋児童文学の古典の例としてチャールズ・キングズリーの『水の子』、東洋と西洋が混合した民間伝承の例として『バリ王女』を取り上げる。この研究は、私たちのポスト産業化社会において子どもたちの無垢と自然への親和性を回復することを目的とするものである。また、子どもたちが水を介して生贄になることが靈感の源としてこの三つのテキスト共通で用いられており、全体性を回復するための私たちの努力においては生態系中心主義の価値観が重要であることを示唆すると論じたい。

II

バリ王女、シム・チョン、水の子は水を介して生贄になった子どもという特徴を共有する。この三人の子どもたちは皆、世俗的な事柄で入水させられた。つまり、七番目の娘に生まれたというだけで(バリ王女)、金銭的授与の代償として(シム・チョン)、誤った窃盗の嫌疑で(トム)。しかし水が中間地帯として働き、彼(女)らの死は最後にはエコロジカルなヒーローやヒロインの再生へと変わる。その後、彼(女)らは盲目や病気の父、邪悪な雇用者に癒しを与えるのである。

蘇生したバリ王女は命を救う水を手に入れ、葬式中の死んだ父を生き返らせる。池のハスの王女に化身したシム・チョンも、その国の目の見えない人だけを集めた祝宴で父に会い、父の目を開かせる結果をもたらす。イモリに変容した幼い煙突掃除人トムは、首尾よく雇い主に彼への過酷な扱いを後悔させるが、そこには作者キングズリーの進化論観も現れている。

伝統的な韓国民話のシム・チョンも、西洋の影響を受けた韓国の巫女物語のバリ王女も、娘が家族の葛藤を解決するためのスケープゴートに選ばれ、ドナルド・ホルツマンが中国の儒教物語に対して述べたのと同様、「孝心」が「あらゆる美德の根源として賛美される。(192)」東洋の物語では、『コンジとパッジ』や『チャンファ、ホンリョン』も含め、女性原理の体現がしばしば葛藤状態の世界に調和と平和をもたらす道具として使われることは注目すべきである。一方、キングズリーのヴィクトリア朝児童小説では、親方と雇われた貧しい少年の関係は、キリスト教の倫理である良心、正義、慈悲と救済によって安堵がもたらされる。ここでは社会契約と労働倫理が、産業社会化の進展でしだいに弱まった家族の絆より優先するのである。

三つの物語の子どもたちは、バリ・ゴンドクの祖父母、ヤン大臣夫人、ハーソヴァ屋敷のジョン卿といった援助者がそれぞれいるものの、社会のアウトサイダーである。善意の援助者よりもむしろ、ムジャンスンや継母ベンドク、グライムズのような悪党の方が子どもたちの運命を決める上で強力だ。子どもたちが投げられる水の世界は、どれもマリア・ニコラエワが「第二の時空間」とよぶカテゴリーに分類される。すなわち、時間がねじれ、魔法の事物や援助者や使者によって幻想と現実が結び付けられる魔術的な空間である(187)。

幸運なことに、溺れた子どもたちの魔法の援助者はすべて彼(女)らを超自然の主人公に変えられる神的な存在であり、バリ王女にとっての仏陀とアミータ、シム・チョンにとっての竜王と天帝、水の子にとってのアイランドの妖精とマザー・ケアリーは全員、詩的正義の道具である。しかし韓国の民話では、邪悪な者は西洋の物語におけるほど厳しく罰せられない。それどころか、悪い母ベンドクはシム・チョンの盲目の父を捨てた後により金持ちの男と駆け落ちするし、バリ王女の悪い夫ムジャンスはバリを九年間も奴隷にしたことで罰せられるどころか、七人の息子を授かる。

全般に、檀君の創造神話やコンジとパッジの物語に見られるように、忍耐や同情や利他主義といった女性の控え目な美德は痛々しいほど詳しく描かれ、それが韓国文学を「恨ハン」、深い悲哀の文学として特徴づける。いずれ、韓国文学において下層階級の女たちの従順さはヒロインにより大きな真実を認識させるが、それは社会における卑賤な立場が彼女たちを自然と美德に近づけるからで、私たちはそれを「エコロジカルな正義」と呼ぶこともできよう。たとえば、バリ王女

は死に瀕した父の命を救う水を得るために、他人のために浅瀬で働き、橋を架け、塔を建てる。同様に、シム・チョンは父の盲目を治すために、施しを請い、水が最も澄んだときに井戸で祈りを捧げる。これらの卑賤な娘たちは苦勞苦難をまったく後悔しない。その代わり、自然と調和した彼女たちの協和的で美德にみちた生活は、魔法の援助者によって最後に高く評価される。

ドナ・ノートンはアジアの児童文学を分析して、「仏教は自然の尊重を強調する一山、谷、川は啓蒙に大きな役割を果たす」(206)と指摘する。この生態系中心主義的な概念は、自然が人間の気まぐれな感情で語られ反響する、いわゆる「道徳化された風景」という西洋的な観念とは鮮やかな対照をなす。ダイナミックな自然原理の象徴としての竜は、西洋と東洋の間の管理できる自然と神秘的な自然との文化的差異を明らかにする。

ドナ・ノートンが示唆するように、アジアの絵画と民話において、竜はしばしば水と、より直接的には「水の循環一雨、川、海、水蒸気、雨一のエネギー」と結び付く(206)。しかし西洋世界では、竜はギリシャ語の「drakon」、つまり「へび」が語源であり、しばしば邪悪な精神を含意する(フィンクル)。竜が象徴するものは、人間の能力を超える自然そのものの力の発揮にまで拡大することも多い。竜の観念同様、「弱肉強食」としての自然観が西洋人の精神に深く植え込まれているので、自然は人間の理性と科学で抑圧しなければならないと考えられている。現代の生態学的観点からすると、東洋人の自然の扱いは「濃いグリーン」の観念により近い。ジョナサン・ベイトによると、「濃いグリーン」はテクノロジーを根底から問題視し、自然は人間だけのためにあるわけではないと考え、自然へ戻るべきだとするディーブ・エコロジストである(37)。一方、西洋の自然観は「薄いグリーン」、自然は人間の幸福に寄与するから価値があると考え、私たちの責任ある消費と生産によって適切に管理できるとする環境保護論者の概念にだいたい似ている(37)。

キングズリーの『水の子』では、トムがマザー・ケアリーによって溺死を免れて変身したイモリは、第二章で竜と比べられている。キングズリーは、「この化石の動物はプレトドラクティルスと呼ばれているが、こんな名になったのは、長い間飛ぶ竜の存在を否定してきた人々が、いまさら恥ずかしくて飛ぶ竜と名づけられなかったからだ」(53)と言う。キングズリーは同様に、「賢い人ほど、水の子どもはいるはずがないと言い張ろうとはしない」(54)と述べる。

「陸の上に子どもがいるとすれば、水の中にも子どもがいてなぜいけないのだ？」という主張は、彼の進化論への信仰を反映している。人間が創造主と創造物の間の積極的な管理者であることは、終末のトムとマザー・ケアリーとの対話にいつそう具体的に描かれる。対照的に、シム・チョンの場合の竜王は、自然の全過程と人間社会をすっかり支配する。竜がしばしば儒教的な賢く善意の支配者を表象する理由は、生態系に固有の価値と宇宙の全要素の相互関連というアジアの非人間中心主義的概念に基づいている。

ケルト神話のエリン王の挿話に基づく(キム・ウォンヒ)バリ王女がムジャンスンからついに手に入れる命を救う水は、ユダヤ＝キリスト教の伝統の聖水をかけて命が再生する洗礼を強く喚起する。またバリが越える川は、生死が川で隔たれる地獄の辺土と結び付き、渡し守カロンがムジャンスンのように冥府の番人として機能するギリシャ神話のステュクス川を想起させる。

『水の子』では、水は科学実験室として機能し、トムはこの環境で「キングズリーが称賛する力強いキリスト教徒の科学者」(ウッド 208)として描かれる。「キリスト教が、異教徒のアニミズム的自然との関係を切断したことが、自然物質の感覚に無頓着に自然を開発することを可能にした」(ウッド 210)としばしば言われる。しかしキングズリーは、ガイアの女神マザー・ケアリーを用いて、特に原始スープの場面において、人間と自然との失われた関係を回復する。1863年にこの作品を出版したとき、キングズリー牧師の宗教的信仰は「崩れかけていた」と言われている。しかし、特に水の子が結局トムの死体から甦った霊魂であることを考えると、「彼はいずれ科学が宗教を支持することを確信していた」(ハーバー 128)と述べるのがより正確だろう。

III

文化的に多様なテキストにみられる、最も無垢な子どもが水を介して生贄になるという主題がこの発表原稿を書く動機だったので、ここで当初の目的に戻り、焦点を合わせよう。なぜ子どもたちが両親や社会の問題の生贄にならねばならないのか？神学者のサンミン・リュは『聖性と暴力』において、「生贄の儀式は小さな犠牲の供物を捧げることで大きな社会的暴力を防ぐ緩衝物として機能した」(26)と主張する。これは、なぜ無力で無垢な子ども、女性、奴隷がしばしば生贄に捧げられたのかを説明する。彼(女)らが共有するのは、殺されたことに復讐する者がいないという特徴である。危機に陥るほど、私たちは生贄の儀式を必要とする。この状況の犠牲者を目撃した後、私たちは遅まきながら何が間違っていたかに気づく。スケープゴートがシム・チョンやバリ王女やトムのようなたいへん無垢な子どもであれば、まるで未来が行止まりになったかのように、私たちが受ける情緒的衝撃はさらに高まる。大人になっても私たちの中には子どもが存在する。子ども、水、変身は生命の織物にすべて織り込まれている。私たちは、ハスやイモリや巫女のように多様な生命形態に自己を変容させれば、他の創造物を見張ることが定められているのではなく他の創造物と共生する宇宙について理解が深まるだろう。どのような形態に変容しようとも、私たちは体内の水を必要とし、江本勝が『水は答を知っている』で水を介して第二の時空間を発見したように、つねに水と意志疎通する必要があるだろう。

Works Cited

- Bates, Jonathan. *The Song of the Earth*. New York: Picador, 2000.
- Emoto Masaru. *Waters Know the Answers*. trans. Ukkwan Yang. Seoul: Namushimneun Saram, 2006.
- Harper, Lila Marz. "Children's Literature, Science and Faith: *The Water Babies*." *Children's Literature: New Approach*, ed. Karin Lesnik-Oberstein. London and New York: Palgrave, 2004. 118-43.
- Holzman, Donald. "The Place of Filial Piety in Ancient China." *Journal of American Oriental Society* 118 (1998): 189-99.
- Kim, Seunghye. *Princess Bari*. Illustrated by Choi, Jungin. Seoul: Biryongso, 2006.
- Kim, Whanhee. "The Shamanist Myth of 'Princess Bari' and Its Western Counterparts: A Comparative Study of the Tales of the Water of Life." *Comparative Korean Studies*, 10.1(2002): 1-33.
- Kingsley, Charles. *The Water Babies*. London: Puffin, 1994.
- Fenkl, Heinz Insu. "The Binary Serpent"
<http://www.endicott-studio.com/rdrm/forbiser.html>
- Nikolajeva, Maria. *Children's Literature Comes of Age*. trans. Seojung Kim. Seoul: Munhak Kwa Jisung, 2004.
- Norton, Donna. *Multicultural Children's Literature: Through the Eyes of Many Children*. Columbus: Person, 2004.
- Ryu, Sungmin. *Sacredness and Violence*. Seoul: Salim, 2003.
- The Story of Sim Cheong*. ed. Korean Classical Literature Institute. Seoul: Baek Am Publishing Co., 2007.
- Wood, Naomi. "(Em)Bracing Icy Mothers: Ideology, Identity, and Environment in Children's Fantasy." *Wild Things: Children's Culture and Ecocriticism*, eds. Sidney I. Dobrin and Kenneth B. Kidd. Detroit: Wayne State University Press, 2004: 198-214.